

日蓮大聖人御書全集

うえのどのごへんじ

上野殿御返事

だいなんひつじよう こと

（大難必定の事）

新版
1842
ゝ
1843

うえのどのごへんじ だいなんひつじよう こと

上野殿御返事（大難必定の事）

けんじがんねん

がつ にち

さい

なんじようときみつ

建治元年（'75）5月3日

54歳 南条時光

5月 ぶつか 芋 頭 石 干 そうろう

さつきの二日、いものかしらいしのようにほされて候

いちだ 富士 上 野 身 延 やま 送 た そうろう

一駄、ふじのうえのよりみのぶの山へおくり給びて候。

ほとけ みでし 阿 那 律 もう ひと てんげんだいいち

仏の御弟子にあなりちと申せし人は、天眼第一のあなり

じゅうにん みでし ひと かしよう しやりほつ もくれん

ちとて、十人の御弟子のその一り、迦葉・舍利弗・目連・

あなん 肩 並 ひと ひと 由 来 尋 見

阿難にかたをならべし人なり。この人のゆらいをたずねみ

ししきようおう もう こくおう だいに おうじ 斛 飯 のう もう

れば、師子頰王と申せし国王の第二の王子こくぼん王と申

ひと みこ しゃかによらい 従 弟 ひと

せし人の御子、釈迦如来のいここにておわしましき。この人

の御名三つ候。一には無貧、二には如意、三にはむりよう

み な み つ

そうろう

いち

むびん

に

によい

さん

無

獵

と申す。一々にふしぎのこと候。

もう

いちいち

不思議

そうろう

世

利 咤 尊 者

もう

尊

昔、うえたるよに、りたそんじやと申せしとうとき

むかし

飢

世

利 咤 尊 者

なのか

斎

時

尊

辟支仏ありき。うえたるよに、七日、ときもならざりける

しゃくしぶつ

飢

世

なのか

斎

時

尊

が、山里にりようしの御器に入れて候いけるひえのはんを

やまざと

獵

師

ごき

い

そうら

稗

飯

げんざい

こいて、ならせ給う。このゆえに、このりようし、現在に

乞

たも

きゆうじゆういつこう

あいだ

じんちゆう

てんじよう

樂

長者となり、のち九十一劫が間、人中・天上にたのし

ちようじや

受

いまさいご

斛

飯

のう

たいし

生

みをうけて、今最後にこくぼん王の太子とむまれさせ給う。

こがね

おん御器

飯

常

絶

阿

羅

漢

金の御ごきにはんとこしなえにたえせず、あらかんとなら

たま

おんまなこ

さんぜんだいせんせかい

いちじ

ご

覧

せ給う。御眼に三千大千世界を一時に御らんありていみじ

ほけきようだいし

かん

ふみようによらい

な

くおわせしが、法華経第四の巻にして普明如来と成るべき

ほとけ

おお

被

たま

みようらくだいし

よし、仏に仰せをかぼらせ給いき。妙楽大師、このことを

しゃく

い

ひえ

はんかる

たも

っ

釈して云わく「稗の飯輕しといえども、有つところを尽く

たすぐ

ゆえ

ゆえ

すぐ

むく

し、および田勝れたるをもつての故に、故に勝れたる報い

う

うんぬん

しゃく

こころ

輕

稗

飯

を得」と云々。釈の心は、かるきひえのはんなれども、

他

持

尊

ひと

飢

これよりほかにはもたざりしを、とうとき人のうえておわ

進

故

ひと

せしにまいらせてありしゆえに、かかるめでたき人となれ

うんぬん

りと云々。

この身のぶさわは、石なんどはおおく候。されども、

うえ なつ

頃

たみ

暇

そうら

かかるものなし。その上、夏のころなれば、民のいとまも候

ごぞうえい

もう

ろうろう

やまざと

わじ。また御造営と申し、さこそ候らん、山里のこと

思

遣

たま

送

給

そうろう

せん

をおもいやらせ給いておくりたびて候。詮ずるところは、

親

別

惜

ちち

おん

しやかぶつ

わがおやのわかれのおしさに、父の御ために、釈迦仏・

ほけきよう

進

たも

こうよう

みこころ

法華経へまいらせ給うにや。孝養の御心か。さることなく

ぼんのう

たいしやく

にちがつ

してん

ひと

いえ

住

処

ば、梵王・帝釈・日月・四天、その人の家をすみかとせん

誓

たま

そうろう

言

者

とちかわせ給いて候。いうにかいなきものなれども、約束

もう

違

そうろう

ひとびと

と申すことはたがわぬことにて候に、さりとて、この人々

は、いかでか仏前の御約束をばたがえさせ給うべき。
ぶつぜん おんやくそく 違 たも

もしこのことまことになり候わば、わが大事とおもわん
真 そうら 我 だいじ 思

人々のせいし候。またおおきなる難来るべし。その時「す
ひとびと 制 そうろう 大 なんきた とき

でに、このことかなうべきにや」とおぼしめして、いよい
叶 思

よ強盛なるべし。さるほどならば、聖霊、仏になり給う
べいこうじよう しょうりよう ほとけ 成 たも

べし。成り給うならば、来つてまぼり給うべし。その時、一切
な たも きた 守 たも とき いっさい

は心にまかせんずるなり。かえすがえす、人のせいしあら
こころ 任 返 ひと 制 止

ば、心にうれしくおぼすべし。恐々謹言。
こころ 嬉 思 きようきようきんげん

ごがつみつか

五月三日

にちれん

日蓮

かおう

花押

うえのどのごへんじ
上野殿御返事